



# 田んぼわらしの ささやき

## 田んぼ 10年だより

第 11 号 2018 年 2 月 10 日発行

田んぼの生物多様性向上10年(略称:田んぼ10年)ニュースレター  
 発行: NPO 法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ) 水田部会  
 所在地: 〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F  
 TEL/FAX: 03-3834-6566 電子メール: info@ramnet-j.org  
 ホームページ: http://www.ramnet-j.org

### 目次

1. 第 8 回田んぼ 10 年プロジェクト地域交流会 in 河北潟報告 ..... 1~2
2. フィリピン ルソン島での田んぼの生きもの調査概要 ..... 2~3
3. 水田部会からのお知らせ/新規参加者一覧 他 ..... 4

田んぼだより第 11 号は、11 月 25~26 日に、河北潟湖沼研究所との共催で開催された第 8 回田んぼ 10 年プロジェクト地域交流会 in 河北潟の様子を報告します。当日発表資料等、詳しくは HP をご覧ください。さらに、昨年 9 月初めにフィリピンのノースウェスタン大学等の協力を得て、呉地正行さんと船橋玲二さんが実施した田んぼの生きもの調査 in 北部ルソン島の報告を掲載します。また、ラムネット J (田んぼ 10 年プロジェクト・湿地のグリーンウェイブ・日韓湿地 NGO フォーラム) が分科会を開催予定のじゅうまる COP3 (2 月 17・18 日) のチラシを同封しています。皆様のご参加をお待ちします。



### 第 8 回田んぼ 10 年プロジェクト地域交流会 in 河北潟報告 NPO 法人河北潟湖沼研究所 川原 奈苗

#### ◆はじめに

このプロジェクトは、2013 年にラムサール・ネットワーク日本によって立ち上げられ、そのなかで地域交流会は、田んぼの生きものに関心を持つ人々の裾野を広げることを目的に、全国各地

で活動を展開する団体や個人、環境省、農水省、地元自治体等の協力により開催されています。今回は、わたしたちが長年取り組んでいる河北潟が舞台となりました。



#### ◆1 日目/河北潟バスツアー

初日に河北潟の現地をまわって現状や取り組みを確認するバスツアーが企画されました。バスツアーは当研究所の理事長の高橋がガイドをつとめました。河北潟では毎年 11 月に外来植物チクゴスズメノヒエ除去活動を実施していますが、同日開催となりましたので、活動の見学をツアーに盛り込みました。水辺に侵入する外来植物の特徴、水路の維持管理の難しさ、協働の取り組みの重要性や活動の成果について、現場を見ながら伝えることができ、参加者の理解も深まったようです。次に日本海と河北潟の間にある内灘砂丘で、全体を見渡しながら、河北潟の成り立ち、河北潟干拓の歴史と、近年の変化について紹介しました。そのあとは河北潟干拓地を周遊し、ヨシ舟を展示している農地の生態系保全の活動場所や、鴨による作物の食害対策として 2000 年より設置されている「おとり池」などを確認しました。今回の地域交流会の会場である津幡町を散策するオプションツアーでは、むかしから地元で大切にされている「しょうず(清

水)」を見学、ちょうど地元の方々が水を汲みに来られていました。その後は、しょうずと自社の酒米で日本酒をつくらせている久世酒造さんを訪問しました。酒蔵での亭主の話しが実におもしろく、参加者の関心も高まり、地域に根ざした酒造りの個性と文化が感じられました。



外来種の駆除作業

## ◆2日目/地域交流会



高橋理事長の基調報告



パネルディスカッション



フロアからの発言

基調報告の1題目は「田んぼ10年プロジェクト」と題して、ラムネットJ共同代表の呉地氏より、プロジェクトの目的や背景、これまでの活動について紹介されました。国際的な動向や視点は、そうした情報を知らない地域の人たちにはインパクトのある内容であったように思います。2題目は「河北潟地域の生物多様性保全の取り組み」と題して、当研究所理事長の高橋より報告しました。河北潟の環境の問題点として、ゴミ、水質、水辺で増殖した外来植物、減少する在来生物、農法による生物多様性への影響、河北潟の無関心層などについて、データを盛り込みながら紹介するとともに、活動の目的や現在までの取り組みの成果と課題、これからのビジョンについてお伝えしました。当研究所は一体なにをしている団体なのかかわからないと言われることも多いですが、ビジョンを含めた全体的な内容を報告でき、地域の理解を得るうえで大事な機会となりました。3題目は「殺虫剤は風景も損なう」と題して、石川県立大学の上田氏より、長年調査されてきたアキアカネの生態から、農業による影響について報告されました。また、原風景となっている幼少期の生きものとの触れあいに着目し、未来の子供たちを危惧するとともに、生物多様性を守ることの根本的な意味を問いかげられました。事例報告では、「河北潟干拓地の取り組み」、「外来種除去活動」について、農地を管理する土地改良区さんより報告いただきました。生きもの元気米に最初に参加を決意した綿村氏から「生きもの元気米」について、地元農家の市原氏が

らはコシヒカリの祖先とされる「大場坊主」の取り組みについて、奥能登棚田ネット協議会の田畑氏からは耕作放棄地の対策に向けてのビジョンが報告されました。

パネルディスカッションでは、当研究所が掲げたビジョンの汽水化と流域保全について意見をいただくことができ、会場からの発言も含めて活発な討論が繰り広げられました。アンケートの回答からは、全ての人が「良かった」または「大変良かった」と回答しており、具体的な評価点としては、報告の多様性をあげる人が多く、パネルディスカッションでの会場からの発言にも関心が高まったようです。また、津幡町での開催についても良かったというコメントが多く、オプションツアーを含めて地域への理解が進んだことを感想にあげている人もみられました。大変意義のある地域交流会となりました。



全員集合

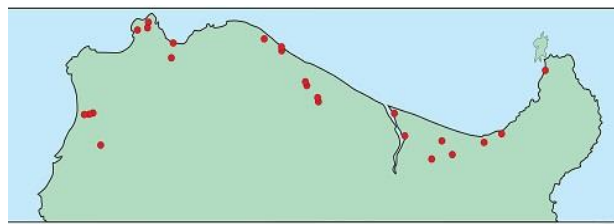


### フィリピン・ルソン島での田んぼの生きもの調査の概要

2017年10月2日から10日にかけて呉地さんと二人でフィリピン・ルソン島北部の田んぼの生きもの調査を行いましたので報告します。今回訪問したのは7000以上の島々からなるフィリピンの中で最も大きなルソン島の北端部です。島の東西それぞれに南北に連なる高い山々があり、東部では多雨・多湿、西部では雨量が少なく乾燥気味です。合計24ヶ所の圃場を見てまわりましたが、年に2~3回収穫できる水田は田植え前から収穫作業中の圃場までが入り交じっていることがとても印象的でした。収穫は膝上ほどの高さで刈り取り、手押し車で持ち込んだ動力式の脱穀機で脱穀します。ワラズは田んぼに山のように積み上げられた状態で放置され、そのまま土に帰ります。籾は20kgほど入る袋に入れて運ばれ、天気

### ラムサール・ネットワーク日本 船橋玲二

良い日には舗装道路の上で乾燥します。



フィリピン ルソン島北部  
調査地点 ●



イトトンボの仲間



アシナガグモの仲間



ヌマガエルの仲間

今回訪れた地域では、農薬の使用やコンバイン等の機械の導入が少しずつ広がり始めている状況で、農薬を使っている圃場では農薬の銘柄をアピールする看板が立てられていました。その看板には Karate や Magnum といったいかにも強そうな銘柄が並んでいました。こんなところにも日本がアジアの国々に及ぼしている影響が見えて複雑な気持ちでした。

雨量の少ない西部では、灌漑施設の整備された地域では水田がありましたが、天水に頼っている山間部では水稻に混じって陸稲が栽培されていました。近年は地球温暖化のため、雨期が前にずれたり、後にずれたりしているとのこと。雨期の始まりが年によって 1 月も違うため、水稻の栽培が難しくつつあるそうです。また、西海岸では 2013 年の台風 30 号による高潮被害による爪痕が残っていました。コンクリート造りの建物の廃墟が見られるほか、沿岸道路の橋はことごとく流されたため、今も復旧工事が行われています。ヤシの葉で屋根を葺いた伝統的な建物は高潮によって跡形もなく流されたとのことでした。

田んぼの生きもの調査は、現在宮城県の大崎地域で検討されている、生きもの指標による田んぼの評価を試みました。この方法は農薬、土づくり、風致の 3 つの視点で田んぼを評価するものです(評価方法の詳細はあらためて報告します)。とりまとめの作業はこれからですが、農薬使用の看板のある圃場では、トンボ類やクモ類が少ないなど、日本での調査事例とよく似た傾向が得られました。カエル類は雨期となる 6 月頃には水田で産卵する個体がどこでも無数に見られるとのことでしたが、10 月は時期はずれで数個体を確認しただけでした。水田での捕食者の働きはとても重要で、トンボ、クモ、コオイムシ、ゲンゴロウなどの仲間が多く見られる圃場ではヨコバイやウンカなどもそれほど目立ちませんが、農薬の使用や肥料の過投入が行われると、そのバランスは大きく崩れ、害虫による被害が増えてしまいます。

東南アジアの水田でも農薬の使用量が増えていて、生きものは少なくなっているとの話を聞いていましたが、ルソン島北部では今のところ豊かな生物相が残されているようです。

灌漑施設が整っていない地域や陸稲を栽培している圃場では、トンボ類やカエル類のような捕食動物が少ないためか、クモヘリカメムシが極端に多いといった特徴がありました。

現地ではノースウェスタン大学のマイケル先生にすべてコーディネートしていただき、期待以上の成果が得られました。植物を中心に研究をされているすばらしいナチュラルリストです。朝から雨模様になった日も「雨なら雨の日のデータがとれるね」と背中を押され、調査をすることができました。ここに御礼申し上げます。また今回のご縁をいただいたアジア猛禽類ネットワークの山崎亨さんにも御礼申し上げます。

今回の調査をきっかけに、ノースウェスタン大学では田んぼの生物調査プロジェクトを立ち上げたいとのこと。結果が楽しみです。



もうすぐ収穫 (調査地の一つ)



### 「私たちの自然派宣言」で田んぼ 10 年に参加された皆さまへ

ラムネット J では、国連生物多様性の 10 年日本委員会 (UNDB-J) による「連携推進事業」として、田んぼ 10 年プロジェクトに参加する団体の中から優れた活動を推薦してきています。個人での登録は推進事業の対象とならないため、交流会等でとりあえず個人参加なさった方々も、可能であれば団体での登録に変更されることをお勧めします。詳しくは事務局までメールでご一報ください。



# 水田部会からのお知らせ



## にじゅうまる COP3 開催案内

●開催日：2018年2月17(土) 全体会合とフォーラム  
2月18(日) 分科会

●会場：國學院大学（東京渋谷）

18日(日)の分科会では、ラムネットJは「ひと・生きものがつなぐ田んぼ～川～干潟～世界」というタイトルで、田んぼ10年プロジェクト・湿地のグリーンウェイブ・日韓湿地 NGO フォーラムの3つのプロジェクトについて報告と話し合いを持ちます。

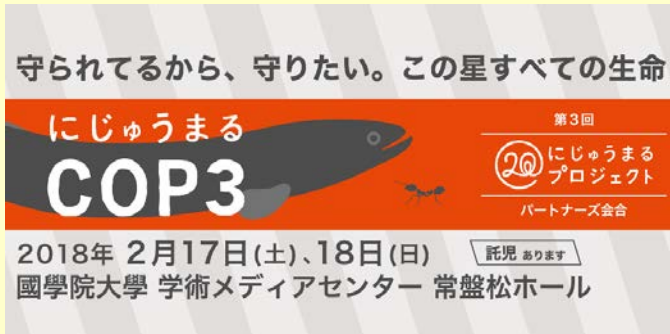
田んぼ10年では、主に「生きもの調査」と「都会の人々の参加」に焦点を当て、参加者全員で意見交換を行います。

また、2020年まで、そして2020年以降の活動に組み込みたい課題についても皆さんからの意見をお聞きます。

田んぼ10年に参加する皆さまとの貴重な意見交換の場となります、ぜひご参加ください。

詳細は同封のチラシをご覧ください、チラシ記載のサイトで参加の申し込みをお願いします。

<にじゅうまるプロジェクト COP3 : <http://bd20.jp/cop3/>>



## 地域交流会の予定

第9回 田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト地域交流会 in 愛知(豊田市)

●日時：2018年6月17日(日)

10:00～12:00 田んぼ巡り

13:15～地域交流会

●場所：豊田市自然観察の森ネイチャーセンター(愛知県豊田市)

●主催：NPO法人ラムサール・ネットワーク日本

●共催：豊田市自然観察の森

●協力：日本野鳥の会他

※詳細が決まり次第 Web サイトやメーリングリストでお知らせいたします。

## ■田んぼ10年プロジェクト新規登録者のご紹介(2017年10月～2018年1月)

214	東京都	団	WWF ジャパン
215	石川県	個	田畑行輝
216	石川県	個	綿村裕
217	石川県	個	長原克信
218	石川県	個	石橋英明
219	石川県	個	橋田由美子
220	石川県	個	野上達也
221	石川県	団	輪島・海美味工房
222	石川県	個	小川俊夫
223	石川県	個	中村明
224	埼玉県	団	カワゴエ・マス・メディア
225	神奈川県	個	齊藤 潤
226	東京都	個	林 鷹央

## 情報をお寄せください

皆様の活動の様子を、メーリングリストや田んぼだよりでご紹介ください。田んぼ10年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」などというご希望もお寄せ下さい。



## 次号の特集：

TTP(田んぼを食べるプロジェクト)が発進しました。田んぼだより次号で活動を紹介いたします。



田んぼ10年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。



## 連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本

info@ramnet-j.org

FAX:03-3834-6566



田んぼ10年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、国連生物多様性の10年日本委員会の連携推進事業に認定されています。



このニュースレターは、平成29年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。

